

「ソウル大学における研究・教育活動の紹介」

山本 尚理

ソウル大学保健大学院環境保健学科

それまで旅行で一度しか訪れたことがなかった韓国で仕事を始めて今年で6年目になる。6年程度の経験で恐縮とは思いつつ、本稿では、韓国の大学院における研究・教育活動について、筆者が知る限りで紹介したい。北米や欧州などの研究・留学先と比較し、隣国である韓国でどのような研究・教育活動が行われているのか、ご存じない方も多いと思う。日本の研究・教育活動を考える上での一つの参考になれば幸いである。

はじめに筆者が所属するソウル大学保健大学院は大学院大学のため、学部教育には直接関与していないことをお断りしておきたい。

まずは教育について。筆者は韓国語が話せないため、講義はすべて英語で行っている。ソウル大学では講義の英語化を進めており、筆者が所属する保健大学院では、およそ1割から2割の講義が英語で行われている。また保健大学院への入学にはTOEFL IBTで79点(TOEIC 700点相当)以上が必須であり、この基準は他の大学院でも同等かそれ以上であろう。このようにソウル大学では講義の英語化を進めてはいるものの、講義の質低下や学生の習熟度への影響など懸念の声も少なくない。日本でも同様の議論があると聞いたことがある。これらの主張は国内学生の教育という面においては正論である一方、優秀な留学生や外国人研究者の獲得には英語化は必須であることも事実であろう。人材獲得も含め大学における研究活動はこれまでにない国際競争にさらされている。日本や韓国など非英語圏の大学が研究競争力を維持するための国際戦略について、これからさらなる議論が必要と言える。

研究について。筆者の研究は実験系であるため、実験系の研究室に限定して紹介したい。韓国では実験系の研究室の多くにおいて、実験や研究室の雑務の対価として大学院生に給料を支払う。給料の原資は各教員の研究費が主であり、大学で定められた上限を超えない限り、給与額の設定は各教員の裁量に任される。ちなみに筆者の研究室では、授業料(年間70万円程度)と生活費(月6-9万円程度)を支援する代わりに、学生には実験や研究室の雑務をお願いしている。このような大学院生へのサポートは米国の大学院でも同様と思われるが、博士課程のみならず修士課程の学生にもサポートが行き届くあたり、学位取得の費用対効果という面においては、ソウル大学は国際的にも恵まれた環境と言えるであろう。またこのようなサポートは優秀な学生(留学生を含む)を獲得するうえで大変重要であり、さらには大学の競争力強化に必要不可欠と言えよう。

大学の国際化について。韓国の大学、特にソウル大学は国際化に対し非常に熱心である。その一例として、世界的に著名な研究者をソウル大学で開催される国際会議に毎年のように招待することが挙げられる。筆者が所属する環境保健学科は、学科として韓国研究財団(日本の学術振興会に相当)のBrain Korea(BK)というプログラムに採用されており、その予算は学内における国際会議の開催や著名な研究者(国際学術誌の編集長など)の招待などに活用されている。学内における国際会議の開催は、各教員が面識のある研究者をそれぞれ招待する形で行われるため、同僚の知人と知り合いになる良い機会にもなる。このように参加者が何かしらの形で既につながっているため、これまで面識のなかった研究者と友情を深めるのが容易であることも学内で開催される国際会議の一つの特徴と言えよう。またBKプログラムの予算は学生の国際会議参加などにも活用されており、筆者の研究室の学生もこれまで英国などへ派遣されている。

国際化に関して言えば、筆者を含めた外国人教員の採用についても言及すべきであろう。2016年度の統計によるとソウル大学2,110名の専任教員のうち107名(5.1%)が外国人と報告されている。筆者を含めた外国人教員の多くは大学が主導するいわゆる「外国人枠」で採用されており、筆者が採用されたときも保健大学院の既存の枠を犠牲にすることなく採用が決定された。大学にとって外国人教員を採用することは、短期的にはQSやTHEなど世界大学ランキングにおける評価の向上に役立ち、長期的には大学の国際化や多様化に貢献することが期待されているのであろう。しかしながら外国人教員の採用には事務処理などにおける翻訳や通訳などのコストがともなううえ、さらにはその後の定着率が国内教員と比較し不透明であるなどリスクも大きいことが予想される。筆者自身が外国人教員であるため、大学における外国人教員の採用についての賛否は控えたいが、少なくとも筆者個人に関して言えば、一人の外国人教員として大学にとってマイナスにならぬよう謙虚に日々精進すべきものと考えている。